

★プレビュー・インタビュー

Reine pur 第5回「アメリカへ」

チェロ・リサイタルを開催

平野玲音 (チェリスト)

訊き手 浅岡弘和



——このシリーズも5回目を迎え、津田ホールでのデビューリサイタルから7年目を迎えての感想からまずお聞かせ下さい。

平野 デビューの時はウィーンに留学してからまだ数年しか経っていないので、本場の音楽を学ぶことに夢中だった気がします。その後、様式はしっかり守りながらも、自分ならではの音楽を深めたい……とシリーズ公演を始めました。7年前とはまるきり違う演奏になるでしょうし、それを多くのお客様に聴いていただけるのが楽しみです。

——今回は「アメリカへ」と題されていますね。

平野 毎回異なるテーマを決めて、それに合うプログラムを自分で練っ

ているのですが、今回は今まで以上に珍しい選曲かもしれません。ウィーンにゆかりがあつてなおかつアメリカに渡つた作曲家たちということで、時代もぐつと現代に近くなつていきます。

——各演目について簡単にお願いします。

平野 まずツェムリンスキーのチェロソナタは若い頃の作品でロマン派に近いきれいな曲です。それでいて新しい響きが随所にあつて個性的な魅力作ですね。

——ツェムリンスキーのウィーンでの現在の位置づけはどうでしょう？ルネッサンスは起つてないようですか？

平野 フォルクスオーパーの「カン

ダウレス王」は話題になつていますが、それ以外は徐々にという感じでしょうか。ナチスの手を逃れてアメリカに行つてもあまり注目してもらえなかつたようです。

——バルトークなんかは皆が助けてくれたのですね。

平野 それでそのまま亡くなつたのですけれどウィーンに残っていたらどうなつていたか興味がありますよね。次はクライスラーの小品で「美しきロスマリン」「愛の悲しみ」「愛の喜び」の三部作です。留学当初、「愛の悲しみ」を真面目に勉強したことがあるんです。ウィーンフィルのイーペラー先生が、ウィーンのおつしやつて、ウィーンならでは軽いボウイングができるまで何度もレッスンしていただきました。

——チェロでヴァイオリンの曲を弾くことについては？

平野 チェロはピアノやヴァイオリンほどレパートリーが多くないので、編曲物でも自分でチェロに合うと思つたものは積極的に取り入れています。ヒンデミットはちょうど没後50年ですが、この幻想小品はオリジナルのチェロ曲で20代の若書き

です。とてもきれいな後期ロマン派風の抒情的な作品です。最後はドヴォルザークのソナチネですが、ちょうどアメリカ滞在中の作品なので今回のタイトルにピッタリです。

——ウィーンでの日常生活はどうですか？

平野 本当に音楽の都と言われるだけあつて音楽と普段の生活の境がない。年がら年中音楽が鳴つているというわけではないんですが、コンサート会場で音楽を聴くのも普段の生活と同じ自然体でできます。私自身もあまり構えずにチェロを弾けるので、自然に人間として深まるのと同時に音楽家としても成長できるような気がします。

——ありがとうございます。

♪共演 ぺーター・バルツァバ (ピアノ)

♪曲目 Ⅱ ツェムリンスキー / チェロ・ソナタ、クライスラー / 美しきロスマリン、愛の悲しみ、愛の喜び、ヒンデミット / 幻想小品、ドヴォルザーク / ソナチネ (チェロ版)
♪5/21 19時、東京文化会館・小ホール
♪デュオジャパン (☎03-5428-0571)